

周恩来と天津

池上正治

三回目の母校視察

1959年5月28日、天津市の西南郊外にある南開大学は異様な興奮につつまれていた。国務院総理の周恩来が視察のために母校を訪れたからである。51年2月、57年4月について、三回目のことであった。大学の指導部にともなわれ、新装なった四階建ての図書館の屋上から、キャンパスをながめやる周恩来の胸には、どのような想いが去来したであろうか。

……裕福な学生の多かった南開学校（中学）でアルバイトのガリバン切りや筆耕をしたこと、有志とともにサークルを組織して雑誌を発行したこと、新劇（話劇）に熱中したこと、日本留学に際してもものした一編の詩、五四運動のなかで編集した新聞のこと、逮捕された学生代表の釈放交渉、当時としては破天荒のことであった男女学生による秘密結社、学連指導者の釈放交渉のなかで自分が逮捕されたこと、獄中での活動組織と記録づくり、そして勤工儉学のためフランスへと旅だったこと……などであったろうか。というのも、ここ天津の地は、日本に留学した約二年間をのぞけば、彼が多感な青少年時代（1913年夏～1920年冬、15～22歳）を燃焼させた場所だったからである。

視察と講演を終えた周恩来は、28日昼すぎ、南開大学の職員食堂に行った。思わぬ訪問に驚き、喜んだ食堂の職員たちである彼らはテーブルをふく手をとめ、皿を洗う手をぬぐって出むかえたという。その時の会話がおもしろい。

「仕事はとても忙しいですか。（すでに定刻は過ぎていた）もう一食つくれますか」
虚をつかれた感じの職員たちの間を通過して、周恩来はカウンターのなかに入り、料理が残っている

のを確かめると、

「昼の料理はまだ売りきれいていませんね。一皿いくらですか」

「大根が五銭で、白菜と春雨のいためものが五銭です」

と答えたのはコック長である。さらに周恩来はセイロのなかの窩々頭（トウモロコシと大豆の粉をまぜ円錐形にして蒸した食品。粗末な主食）が一個二銭であることを確かめると、後をふりかえり、随行員や新聞記者たちにむかって、

「ここで食事にしよう。あなたたちも待たされて腹がへったでしょう。私がごちそうするから。一緒にどうぞ」

といって笑わせた。そして、五銭の大根、二銭の鹹菜（オシンコ）、窩々頭二個の昼食をすませた。職員たちの強い希望にもかかわらず、特別な料理をつくることはおろか、大根や窩々頭を温ためることを、彼は許さなかったという。帰りがけに再びキッチンに入った周恩来は、メリケン粉をこねていたコックたちと（彼らに手を洗う暇をあたえず）、固く握手をし、

「ありがとう。皆さんの仕事はとても大切な仕事です」

という言葉を残して、職員食堂をあとにした。

南開学校の免費生

1913年8月、15歳の周恩来はようやくの思いで天津南開学校に入学した。ようやくの思いというのは、南開受験の前に清華学校を受験して失敗したこと、合格した南開学校への入学には周囲の強い反対があったこと、の二つをさす。清華大学の前身である清華学校は、「義和団事件」の賠償金

により、アメリカが中国と合併で北京につくった予備学校で、アメリカ留学への最短コースであった。もし彼が清華合格をはたしていたならば、日本留学から五四運動、そしてフランスへの勤工儉学とは違った人生が、あるいは開けたかも知れない。第二の、そして現実の問題は、親がわりの伯父が南開入学に反対したことである。周恩来はこの伯父につきそわれて、1910年春、故郷の江蘇省淮安をはなれ、「高粱をたべ、カラッ風に吹かれる」（1966年、周恩来が遼寧大学の紅衛兵に語ったこと）東北の瀋陽で少年期を送っていた。周囲の反対をおしきってまで周恩来が南開入学を強行したことは、たえず周囲との調和を心がけるとされる彼の性格からみれば、きわめて異例のことである。そしてこの決定は、在学中の勉学ぶりにも、卒業後の進路決定にも、きわめて大きな影響をあたえたように思われる。

南開学校は、1904年、海軍士官出身のナショナリスト張伯苓により、西欧の教育制度を手本として創設された全寮制の、男子の私立学校である。自由な校風、難しい入試、高い学費で知られていたというから、典型的なブルジョア学校だと考えていいだろう。周恩来にとって頭痛の種は、学費と食費のかさむことであった。親がわりの伯父の反対を押しきって入学した手前、あまり大きな経済的援助は期待することはできなかったし、伯父の方もそれほど余裕はなかったようだ。これを救ったのは、周の人格であり、才能であった。校長の張伯苓は、この整った顔だちの新入生が作文の授業などは半分の時間で書きおえていることを目撃し、その文章のできばえに感心していた。この才能を見こんだ張校長は、一年生のうちは筆耕やガリバン切りなどのアルバイトをさせていたが、二年生からは学費と雑費を免除した。全校で唯一の免费生であった。個人的にも、月一回くらいは自宅に招いて食事をさせ、口ぐせのように「周恩来は南開の一番立派な学生だ」と言っていたとい

う。周恩来は成績でそれに応えた。

1914年 二班国文伝観

16年 二班化学第一位

全校筆算第一位

全校国文第一位

17年 卒業試験国文第一位、優等賞

といった具合である。「伝観」とは、よくできた作文を手本として、クラスに回覧することである。

この南開学校は現在の南開中学（天津市南開区四馬路）にあたり、当時の教学楼は「周恩来同志青年時代在天津革命活動紀念館」（以下、周恩来記念館という）として一般公開されている。

敬業楽群会と『敬業』誌

周恩来が持ちまの「組織の才能」を試しはじめたのは、1914年3月、一年生の後半からのことである。この月、二名の学友と語らって、「大衆を団結させ」、「新学を勉強する」という目的で「敬業楽群会」を組織した。放課後の討論と文芸活動を目的としたこのサークルで、周恩来は最初の二年間は智育部長、副会長、機関誌『敬業』編集長をつとめ、三年生のときは会長になった。この会の成立とその後のいきさつについては、『敬業』第1期（1914年10月）の「小会成立小史」に、当初の週2回ほどの討論会から発展して、やがて校長をむかえての成立大会にいたるまで詳述されているが、ここでは省略する。注目すべきことは「小史」の筆名「孤竹野人、飛飛」が、「翔宇」「恩来」とともに、周恩来のペンネームであることだ。

『敬業』誌は第1期（1914）から第6期（1917）まで、半年刊として発行された。周恩来の筆になるものとしては、

論文 「私の人格観」「老子とハクスリーの学説の異同」など4本

文芸 詩「春日偶成」など3編

短文「射陽憶旧」など2編

新劇『一念差』内容詳述

随 筆 「飛飛漫墨」4編

記 事 「本会成立小史」など2編

筆 録 「芝罘壯遊記」など4編

訳 文 「医学と中国の関係」(英文から)

などであり、多彩かつ大量である。

作文の手本たる「伝観」に指定された周恩来の文章は、いずれもメリハリのきいた格調の高いものである。ことに、大人物の出現を期待した「私の人格観」、小さな自伝ともいふべき「射陽憶旧」などに、その感が強い。また義侠小説『巾幗英雄』と『一念差』内容詳述はなかなかの美文であり、「飛飛漫墨」は周恩来の専用コラムといったところである。機会があれば、これらの全文を紹介したいが、ここでは、彼の人生で最初の五言絶句のなかに、当時の志を読みとるにとどめたい。

春 日 偶 成

(一)

極目青郊外,

(郊外は見わたすかぎりの青であるのに)
煙霧布正濃。

(祖国には黒い霧と硝煙の臭いがたちこめる)

中原方逐鹿,

(中原にまさに鹿を逐い)

博浪踵相蹤。

(一人また一人と博浪をめざせ)

(二)

桜花紅陌上,

(桜が満開の田の道)

柳葉緑池辺。

(柳の緑がいっぱいの池のふち)

燕子声声里,

(ツバメの声がするなかで)

想思又一年。

(まためぐってきた春を想う)

周恩来が16歳のときの作品である。敬業楽群会で春のハイキングを組織し、その際の作品21編を『敬業』創刊号に発表した。「花香り鳥歌う」といった詩がほとんどであり、「春日偶成」は異色の作品である。前年の1913年3月、宋教仁が暗殺され、袁世凱の野心が露骨になっていた折である。韓の張良にたのまれた力士が博浪の地で秦の始皇帝を刺殺しようとした故事をふまえた「博浪踵相蹤」の一句の意味は、おのずと明らかである。

『校風』誌にみる論調

1915年5月4日、日本に迫られた袁世凱が「二十一カ条要求」に署名するや、中国ではこの不平等条約に反対する大きな動きがまきおこり、この日は「国恥記念日」とよばれた。周恩来は敬業楽群会で激しい反対演説をしたばかりでなく、6月6日、河北公園(いまの中山公園)で開かれた集会でも、外債を買わないように呼びかけている。前項の『敬業』は有志のサークルの機関誌であるが、これとは別に、南開学校の校誌『校風』が毎週発行されていた。周恩来はこれに「記事類総主任」「経理部総経理」という肩書きで参加しただけでなく、自分でもかなりの量の執筆をしている。

論 文 「誠が物を動かすこと」「わが校の新劇感」など5編

演 説 「中国の現時の危機」1編

記 事 「旅行盛挙」など13編

啓 事 5篇

通 信 「南開卒業生へ」など2編

筆 録 「校長訓詞」など3編

といった具合である。「啓事」とは社告ともいふべき内容のもので、ペンネーム「飛」が用いられているが、論文や筆録などは実名である。上記のうちから、演説を以下に訳出し、その「聞く者をして感服させずにおかなかった」雄弁ぶりをうかがう手がかりとしたい。この演説「中国の現時の

危機」は、1916年10月、全校弁論大会でのものであり、『校風』第45期（1916年11月8日号）に発表された。

周「中国が現在きわめて危険な状態におかれていることは、諸君すべての知るところです。しかし、私の見解は諸君の思うところと必ずしも一致するものではありません。その違いをあえて諸君に語るのは、諸君の良心に訴えるためであり、言わざるを得ないからです。心に感じた危機を、告げざるを得ないのであり、諸君の覚醒のための手がかりとするにすぎません」

周「中国の現時の危機は、二つに分けて考えることができます。第一は事実に属することであり、第二は精神に属することです」

周「まず最初に、事実について語ります。内患について言えば、国内ではどのような事業を興すにしても、猛烈に興すことが大切です。時がたてば、いつしか話題にのぼらなくなるものです。猛烈に興すことの弊害のみを考えて、適当な方法やいいかげんな手段を採用してはなりません。一事を興すには、利害が複雑にからみあうものですが、その軽重を考えてから、方法を決定することです。個人を中心にして考え、不本意ながら時流に従っているとすれば、それは真剣な態度ではありません。また、新旧の勢力というものがあり、それは決して相容れるものではありません。二つの勢力が対立しているのに、調和を心がけるとしたら、それはいいかげんな態度です。歴史的にみるならば、恒靈のいいかげんさが東漢の群雄割拠をつくり、玄德のいいかげんさが唐末の藩鎮の跋扈を許し、熹宗のいいかげんさが明末の宦官の専横をもたらしたのです」

周「最近のことを振りかえってみましょう。民国が成立してすでに五年になります。辛亥の和議のいいかげんさが、国会解散と法律無視を許した

のです。癸丑革命のいいかげんさが、帝制を準備するなどということを経験したのです。今日の雲南革命のいいかげんさが、今回の政局の混乱を招いたのです」（中略）

周「（政局の混乱は）ああ、武人政治の害によるものです。工業とは自国の物資を作ることであるのに、物資のほとんどは外国からきたものであり、資本は外国から借りようとします。純粹の国産品は数えるほどしかありません。試みに、我らの身にまわっているもので、本当の国産品がどれだけあるのでしょうか。商業といえば、これだけ大きい中国であるにもかかわらず、資本家がいません。輸出税が重く、輸入税が軽いとあっては、国産品が外国に流出することを望むのは、天に登るほど難しいことです。農業といえば、土地が広く人間の多い中国であるのに、東三省や蒙古、新疆は無限の荒野であり、内地は過密の人口に悩まされています。これが居住と拓殖の不均衡です。これら全ての原因は、どれ一つとして政治の悪さに根ざさないものではありません。その結果、全事が停滞しているのです。政治の悪さはまた、どれ一つとして、いいかげんさの結果でないものではありません。もし辛亥の役の結果が本来のものであったなら、黄竜を直撃し、旧弊を取りのぞいたことでしょう。あの時、政治を一新していたならば、二次革命や三次革命の必要はなかったばかりか、教育の不振興、商工業の未発達、農山村の未開拓などということはなく、今日の危機の時代が訪れることもなかったのです！ 以上のことは、いずれも内憂に属することです」（略）

周「第二の精神について。わが国の国民道徳はすでに淪落の極にあります。この決定的に悪化した状況は、もう回復のしようもありません。しかし、事実として窮地におかれていても、国の魂がありさえすれば、挽回することができるのです」（略）

周「以上に述べてきたように、事実がこのよう

であり、精神による回復がこのようなであるとすれば、諸君、危窮の程度が、困難の度合いが、今日の中国ほど大きかったことはありません。そして国家は確実に危機に頻しています。我々青年は、この時期にあたり、奮起して国家の危機を救おうとしても、力量不足を知らされるばかりで、無念の限りです。本日、私の言わんとすることは、私の最も敬愛する同学の諸君に、いささかの注意を喚起してもらい、天下の興亡は匹夫にも責任のあることを知ってもらうことであって、国家大事のあまり足しにもならない若者の従軍志願を主張することではありません。ご静聴を感謝します。最後に私は『やるべき時にはやる』という校長の言葉をもって、終りとします」

全文は2500華字ほどであり、その約三分の一を訳出したが、原文の味わいがどこまで出せたか、残念ながら、自信がない。当時の周恩来は18歳である。

周恩来の演じた女形

周恩来のハンサムぶりを記録した者は少ない。A・スメドレーの「私が会った人で忘れがたいのは周恩来である。彼は普通の人より背が高く非常に美しい。人並はずれて知的な顔をしている」という絶賛から、反共を目的として編まれた趙一貫『中共領袖の素描』の「たしかに周恩来は映画の俳優に似ている。丈が高くて色が白く、顔は面長ですんなりとしており、……たしかに東洋の貴公子である」まで、論調は一つである。話は少し前後するが、1961年夏、「四大名旦」のひとりであった程硯秋（満州族）の逝去三周年を記念して、北京の中南海にある紫光閣でささやかな集りがもたれた。主人は周恩来、主客は程夫人の果素英であり、鄧穎超や梅蘭芳、趙榮琛、王吟秋、李玉茹などの顔ぶれがあった。食卓につく前、参加者のすべてが京劇の一くだりを唱った折、鄧穎超は「

皆さんは総理に出演をお願いすべきですよ。若いころに話劇をやっていたんですから」と語ったという。

中国で最も古い話劇（新劇）団は、1906年、歐陽予倩や李叔同らによって東京で組織された「春柳社」とされる。これに遅れること三年、1909年（清・宣統元年）、天津の南開学校でも有志により新劇「用非所学」が演じられている。進取の気風をもった天津の土地柄に加えて、学校の創設者である嚴修という人が新劇の熱心なパトロンでもあったから、有利な条件があったといえる。ただ問題は、女性の役を誰が演じるかであった。すでにのべたように南開学校は男子校であり、若い男女が自由に交際するなどという時代ではなかった。この「女形」は学生あるいは教員の有志によって演じられた。後に作家として名をなした曹禺（万家宝）は、1928年、イプセンの「人形の家」でノラを演じている。そして誰よりも多くの女形を演じたのは、やはり周恩来であろう。「恩怨縁」の焼香婦、「因禍得福」の慧娘、「華娥伝」の華娥、「一元錢」の孫慧絹、「老千金全徳」の高桂英などがそうである。甥の周恩来の南開入学に反対した伯父からみれば、実になげかわしい墮落であり、卑しむべきことだったにちがいない。しかし、学友や教職員は拍手喝采を惜しまなかった。

新劇における周恩来の役割は、舞台の上だけではなかった。彼は『校風』誌第39期（1916年9月25日号）に、「わが校の新劇観」と題するかなりの長文を発表し、ヨーロッパの新劇のあり方を紹介するとともに、学ぶべき点のあることを力説している。また『敬業』誌第五期（1916年10月号）には、「飛飛」の名で「新劇『一念差』内容詳述」をのせている。これは南開学校の創設十二周年を記念して演じられた六場劇である。その荒筋は、清末の官僚社会の墮落を暴露したもので、広東で役人をしている葉中誠が広東税関の要職を手に入れるために、すでにそのポストにある李正斎を陥

れ、李家を破滅させて目的をとげるが、良心の呵責に耐えかねて、最後は自殺するというもの。その内容は、上述の演目と同じように、「社会の腐敗を描いて、少年の愛国精神を発揚させたもの」(周恩来)であった。

この頃の周恩来は、「一念差」にも出演しており、やがてフランスでの勤工儉学をともにすることになる李福景と同じ部屋に住んでおり、「劇中に生活する」という程であった。その理由は、熱心な新劇団員である李福景から、劇の何たるかを学ぶためであったという。後年、E・スノーは、ジュネーブ会議やバンドン会議で示された、周恩来の水際だった外交手腕が、南開時代の演劇生活に基礎のあることを指摘している。

「大江歌罷掉頭東」

1917年6月、優秀な成績で南開学校を卒業した周恩来は、4カ月後の10月、日本留学のため天津港を出発した。「日本人は西欧に学んで成果をあげた。中国人も日本に学ぼう」という時代であった。ひと頃より減ったとはいえ、日本には4000人にのぼる中国人留学生がいたという。出発に先だち、周恩来は一編の七言絶句をものしていた。

大江歌罷掉頭東，

(「大江……」を歌いおえて東をめざし)

邃密群科濟世窮。

(諸々の科学を修めて世の窮状を救う)

面壁十年圖破壁，

(壁にむかって十年、壁を破ろうとして)

難酬蹈海亦英雄。

(目的を果さず海に投じたとしても英雄である)

19歳の周恩来は実に雄壮な気概をもって、日本へと旅立ったものである。第一句の「大江……」とは、南宋の文人・蘇東坡(1036~1101)の詞「念奴嬌・赤壁懷古」の「大江は東に去り、浪淘は尽き、千古国流の人物」をさす。あまりにも有名な

冒頭の部分である。第二句は、留学の目的と救国の方法をのべる。第三句前半は、十年を費して悟りをひらいたダルマ大師の故事をのべ、後半では「画龍点睛」の故事と旧社会の打破とをかける。最後の句は、1905年11月、明治政府の「清国留学生取締規則」に抗議するため大森海岸で投身自殺した陳天華(1875年生れ)を英雄としてたたえ、不退転の決意を示している。

面白いことに、周恩来の自筆の詩が世に知られるようになったのは、彼の死後のことである。周恩来の南開学校のクラスメートであり、日本でも同じ留学生として親交のあった張鴻誥が、六十年にわたる秘蔵品を公開したからである。張鴻誥の証言によれば、1919年3月、二年たらずの留学を終えて帰る周恩来のために送別の宴を開いた折、記念品として贈られたものだという。七絶のあとに小さく「右詩乃吾十九歳東渡時所作」(右の詩は、私が十九歳で渡東する時に作ったものである)「民国八年三月」とある。その書体は、顔真卿流に男性的であり、精厳かつ剛健であって魏碑を思わせる。

この間、周恩来は東京から京都へと居を変えている。それには経済的な理由もあったとされるが、むしろ留学生が落ちついて勉強できるような時代ではなかったと考えるべきであろう。

天津の五四運動のなかへ

1919年4月、雨の嵐山、桜の円山公園を見おさめとして、周恩来は神戸から天津へ向かう船のうえの人となった。この年の1月から、フランスのパリでは第一次大戦後の講和会議が開かれていた。中国はこの大戦に連合国の一員として公式に参加した戦勝国であった。にもかかわらず、敗戦国ドイツの得ていた山東省の權益特権は、中国ではなく、日本に移譲されるという。ベルサイユ条約には、租界の返還をふくむ中国側の要求は何ひとつ

として含まれていなかった。中国のインテリことに学生層の怒りが爆発した。5月4日午前、小雨ふる天安門広場には、北京大学の学生を先頭に、3000人以上の大学生、中学生が集合した。そして「中国は中国人のものである」「山東の權益を奪回せよ」「二十一カ条を廃止せよ」「ベルサイユ条約を拒否せよ」などのスローガンを叫びながらデモ行進をし、親日的政治家として知られる曹汝霖（交通総長、二十一カ条締結時の外交部長）の豪邸に押しかけ、これを焼きはらってしまった。「五四運動」である。

翌5月5日、北京での衝撃的なニュースは天津にも伝わった。7日には早くも、逮捕学生の釈放、ベルサイユ条約の拒否、親日政治家の処分を求めて、天津の学生によるデモが行われている。そして男子学生を中心とする「天津学生連合会」、女子学生を中心とする「天津女界愛国同志会」が結成された。こうした一連の動きは天津に限ったことではなく、上海や広東、南京など全国の主要都市で、いわば連鎖反動的に起っており、「全国学生連合会」へと発展していく。五四運動の最も大きな特徴のひとつは、学生を中心とし、一般の市民や労働者をふくむ、広汎な共同戦線が組まれたことにある。上海で6月上旬に行われた民衆集会、政治ストは、その典型である。そして、ロシア革命の影響が着実に中国に流入しはじめていた。

5月23日、北洋大学や直隸第一師範、南開学校など15校による統一ストが実行された。「天津学生連合会ストライキ宣言書」にいう。「ああ、わが国はすでに国ではなく、わが民はすでに民ではない！ 売国奴は日本に媚びへつらい、わが国の吉林の森林や金鉱、南京の鉄道、安徽の銅鉱、大沽の造船所、漢冶萍公司をば、日本人に献じてしまった。売国奴の眼中には私腹を肥やすことしかなく、祖先伝来の宝庫を守ろうとはしない。最近の青島の事件も、日本人が中国人を侮蔑したものである。ところがこの売国奴は、内政はもっぱら

武力を頼りとしている（中略）……忍ぶべきか、忍ばざるべきか。北京ではすでに二十七校の学生が一斉ストを敢行した。上海もこれにつづき、湖南や湖北、南京で学生の運動が大きな高まりをみせていることは、各紙の報じているところである。天津の学生は仁を譲るべきではなく、大衆的に立ちあがって南京や上海につぎ、全国の学生と連合し、毅然として日本を制圧し、売国奴を皆殺しにして、自国を救おうではないか。これは、われら青年の天職である。願わくば、四億の同胞がいちはやく目醒め、外交の失敗を挽回し、内政の改良を画策せんことを。わが民は不幸であり、わが国は不幸である」

この間、周恩来がどのような具体的な行動をしたかは必ずしも明らかではないが、各校の指導者と連絡をつけながら「反帝反封建の戦士」としての頭角を現わしていったことは事実である。また、天津の学生は積極的に北京の運動に参加した。8月23日、請願のために総統府に向かおうとして逮捕された25名のなかには天津代表がおり、これに抗議して上京した天津の数百名は、北京の長安街で、三日三晩にわたって軍警に包囲されたあげく、責任者・馬駿は逮捕されてしまった。

『天津学生連合会報』の編集長

周恩来に期待された役割は、かつて『敬業』『校風』誌でみせた文才を買われて、『天津学生連合会報』の編集長であった。請われて出席した編集委員会の席上で、周は新聞の記事は文語ではなく口語で書くことを主張した。この提案に反対する者がいなかったばかりでなく、編集委員は全員一致で、彼を編集長にしてしまった。

1919年7月21日、斬新なスタイルの『天津学生連合会報』が誕生した。まず第一の特徴は、タイトルの紙名の下に英文で「THE TIENTSIN STUDENT」とあり、その下に「DEMOCRACY: A GOVERNMENT FOR THE PE-

OPLE BY THE PEOPLE AND OF THE PEOPLE OUR—MOTTO」(我らのモットーは、人民の、人民による、人民のための政府：民主主義)とあったこと。第二に、読みやすい口語で書かれていた。創刊号の社説「革新、革新」は周恩来の筆になるもので、社会を改造し、自覚的に思想を改造すべきことを説いており、青年学生に多大の影響をあたえたという。その他、主張、時評、評論、新思潮、文芸、演説要旨など、実名あるいは「飛飛」などのペンネームで書かれた文章は実に多い。

最初は三日に一回の割で発行された『連合会報』のもう一つの特徴は、全国で燃えさかる学生運動のニュースを掲載する以外に、天津地区での学生集会やデモコースの予定を知らせていたことである。言わば、司令書といった性格を兼ねそなえていた。そして、まさにこの性格のために、当局から狙われる存在であった。9月22日、『天津学生連合会報』に対して当局から「停刊命令」が出された。しかし、学生の側にはそのような障害をのりこえるだけの知恵と力量があった。15日後に復刊した『会報』の論調は、さらに激烈なものとなっていた。

『会報』の印刷をひきうけてくれたのは、旧城内のすぐ南にある南市の協成印刷局であった。昼の街頭闘争や編集会議を終えた後、周編集長が夜おそくまでここで原稿を書き、校正にあたることもしばしばであった。この編集長は、時間が許せば、印刷の手伝いもするというので、工場の労働者たちの間では評判が高かった。このことは同時に、周恩来が革命の道理を印刷労働者たちに宣伝するための、絶好の条件でもあった。発行部数約二万部の『天津学生連合会報』を印刷し、周編集長もそのそばで手伝った印刷機は、実は日本製であった。この印刷機は「歴史の生きた証拠」として、現在、周恩来記念館に、第四十二号を印刷中という体裁で展示されている。

しかし、周恩来が『会報』の編集にかえて、闘争の最前列に立たなければならない日が訪れた。北京で請願中の代表が逮捕されたこと(8月23日)を報じる号外をだしたばかりのところへ、その釈放要求にむかった天津の一行が三日間も路上で包囲されたあげく、責任者の馬駿が再び逮捕されたというニュースが伝わった。もはや行動あるのみ。周恩来や郭隆真(女性、回族)らの天津学生代表は北京に急行した。炎天下の北京では、学生や労働者の集会とデモが、再び高まりをみせていた。数千人という集会の動員数を前に、段祺瑞政府はやむなく、8月31日、二回にわたる被逮捕者を全員釈放したのである。

『覚悟社』の結成

9月2日、二度にわたって逮捕された学友たちを奪還して、意気揚々と引きあげる学生たちの顔は明るかった。北京から天津にむかう車中、この間の請願・逮捕・釈放をめぐる報告がなされ、話題はいつしか今後の方針に移っていった。健康的で明るい郭隆真が、天津学生連合会と女界愛国同志会とを合体して、愛国運動の中核とすべきであると主張した時、誰もが大きくうなずいた。これまでもこの二団体が中心となって天津の五四運動をリードしてきたが、その目的が明らかに一致しているにもかかわらず、共同の歩調をとることができないでいた。その原因は、一つには封建的な観念からぬけきれなかったことであり、二つには統一的な指導部がなかったからである。郭の発言をうけて周恩来は、二つの団体を合体させることは闘争にとって有利であるばかりでなく、それ自体が伝統的な封建観念に対する批判であること、さらには両団体の中心メンバーによる強力な中核づくりが必要であることを指摘した。誰もが、眼のまえが明るくなることを感じたし、郭隆真は双手をあげて賛成し、一日も早く実行するようせきたてた。

9月16日、草草庵にある学生連合会の事務所で会議が開かれていた。司会者は周恩来、参加者は男女各10名で、学連会長の譚志篤、釈放されたばかりの馬駿、元気澆刺の郭隆真、最年少の鄧文淑（穎超、16歳）などの顔ぶれがあった。天津の学生運動の指導的中核をめざした「覚悟社」の誕生である。この会議では、結社の主旨や任務、加入条件などが決議、採択され、白話文による機関誌『覚悟』を発行することが決議された。覚悟社はこれまでの闘争の経験から生まれたものであり、組織構成にも、個人の意識にも、それなりの「覚悟」はあった。予想される困難に対処するため、参加者全員に次のような番号と変名がつけられていた。

- | | |
|-------------|---------|
| 1 鄧文淑（穎超、女） | 壹，逸豪 |
| 3 周之廉（女） | 珊 |
| 5 周恩来 | 伍豪，伍，五 |
| 9 趙光宸 | 奈因 |
| 11 薛撼岳 | 石逸，石遺 |
| 13 郭隆真（女） | 石衫，石珊 |
| 18 管易文 | 石霸，関錫斌 |
| 19 潘述庵 | 石久，潘世綸 |
| 20 胡維先 | 念豪 |
| 21 吳瑞燕（女） | |
| 25 劉清揚（女） | 念吾 |
| 28 李震瀛 | 二八，李宝森 |
| 29 馬駿 | 念久 |
| 31 李錫錦（女） | 衫逸 |
| 34 鄭季清（女） | 衫峙，鄭岩 |
| 36 張若名（女） | 衫陸，張硯莊 |
| 37 張嗣靖（女） | 衫棄 |
| 41 譚小岑 | 施以，小，小以 |
| 43 李毅韜（女） | 施珊，施山 |
| 50 譚志篤 | 武陵 |

これらのメンバーによる学習と活動は、かなり精力的に行われたようだ。内部のそれは省略するとして、外部から講師を招へいた学習会に次の

ようなものがある。

9月21日 李大釗（民衆の勝利）

26日 劉半農（白話詩）

11月1日 錢玄同（白話文学）

6日 周作人（日本の新しき村）

双十節（10月10日、中華民国の建国記念日）あたりを境として、それまで守勢にでていた軍閥政府は攻勢に転じ、学生運動に対する弾圧も強化されるようになる。翌20年1月、「日貨」を調査中の中国人が日本人の浪人に暴行された事件を機に、各界連合会や学生連合会の責任者は逮捕され、それらの事務所を封鎖された。覚悟社の会合は、フランス租界の某所で、極秘裡に開かれるようになった。20年8月、覚悟社としては最後の集まりとなった年会が開かれ、周恩来が一年来の活動を総括した後、これからも共同の目標にむかって進むことを確認して、記念撮影をしている。この十四人の若者が前後二列にならんだ写真を見た人は少なくないだろう。

ちなみに周恩来は、1919年9月、開設したばかりの南開大学に入学している。学籍簿には「姓名・周恩来」「民国8年9月入学」とだけある。それ以下の成績記入欄が空白であることが、当時の彼の「履歴」を物語っているようだ。

『覚悟』誌にみる論調

1920年1月20日、覚悟社の機関誌として発行された『覚悟』創刊号の表紙は実に斬新なデザインである。いくらか灰黄がかった表紙の上約三分の一ほどに赤色で、「覚悟」の二字、それを上下にはさむ太い線、上の線に割りこんだ星印（なかには1の数字）だけが印刷されている。10万字にちかい内容は、社告三編、結成からの日録ともいべき「三カ月半の「覚悟」社」の外、周恩来の筆になる「覚醒」（本稿では「覚悟社」『覚悟』を除き、「覚悟」を覚醒と訳出した）「覚醒の宣言」「学生の根本的覚醒」「工読主義」などがあり、

鄧文淑の「なに故に」という短文もある。

「覚醒」は明快な論旨でつらぬかれている。

「『覚醒』とは何か？ 人間が地上の人間以外の生物と異なるところは、『覚醒』することである。それ以外の生物は『覚醒』することができない。『覚醒』を起点として、人間は自分を知ることができる。自覚すれば、人生の人格、地位、趨勢を解決することができ、進化の方向で『人間』にふさわしい生活に適應することができる。こうしたすべての活動が『覚醒』である」

「なぜ『覚醒』か？ 人生の最大の要素は靈魂である。靈魂には、理性と社会性がある。理性の衝動は一切の事物の道理を主宰し、社会性の衝動は社会環境を改変する。このような衝動作用は、すべて『覚醒』から生じるものである。……感覚から始めて、一切の事物の真理を悟ること、それが『覚醒』である」

「どのように『覚醒』するか？ 『覚醒』の要件は、自分から『覚醒』することではない。自分で『覚醒』するには、静かな内省方法により、想念のなかから『覚醒』する場合、他人の働きかけをうけて考察のなかから『覚醒』する場合、置かれた環境に感動し、比較のなかから『覚醒』する場合がある」

このようにきた三段論法は、最後の部分で、

「『覚醒』から生まれた効果は、絶対に現状に満足することがなく、新たな一筋の道を拓くことである。たえず前進し、無限に進化することである。たて横の糸にたとえば、横糸の『覚醒』は止どまることなく自分と他人を利し、たて糸の『覚醒』は永遠に解放と改造、破壊と建設をくりかえすことである」と結論している。

「覚醒の宣言」には「八、十二、二九」と日付があり、民国八年（1919）に起草されたものである。「宣言」は、冒頭で、20世紀の新たな潮流のなかで、『覚醒』の声が澎湃として高まりつつあること、現代の進化にふさわしくない軍閥主義や

ブルジョア階級、党略派閥、官僚、男女の不平等、頑迷な思想、旧道德、旧倫理などはすべて消滅あるいは改革するべきであることを指摘した後「覚悟社」の具体的な行動方法を示している。

1. 共同で研究し、すべての主張を発表する。
2. 社会のすべての實際生活に対し、論評する態度をくずさない。
3. 社外の人間の言論を紹介する——著作と講演。
4. 世界の新思潮を注入する。

そして「努力せよ！ 奮闘せよ！ 一步一步と『覚醒』し、一步一步と『進化』せよ。『覚醒』は無限であり、『進化』は無窮である」と結論している。

「学生の根本的覚醒」は最も興味深く、最も長い論文である。それほどまでに展開した「覚醒」と「宣言」を前提とし、学生の定義を「勉学を主とし、労働に従としてゐる者すべて」とした後、学生の責任は「個性を伸ばし、学術を研究し、実験を重ねるだけでなく、社会をして人類の幸福をもたらすような社会にさせること」としている。実は、興味深いのは、次である。その先の部分では（論文の大部分をしめる）、「現代中国の学生の弱点は何か」というテーマを、微にいり細をうがって、あくまでも追究している。その全体はとも紹介しきれるものではなく、項目にとどめる。

1. 心理上の弱点（15項目＝誤った求学目的、悲觀的なこと、思想上の誤り、感情上の誤り、薄弱な意志、きわめて怠惰、近視眼的、猜疑心、同情心に乏しい、迷信、利己的、階級觀念に欠ける、虚栄心、嫉妬心、孤独癖）
2. 態度上の弱点（11項目＝真剣に研究、批評しようとしめない、他人の研究と批評を受けいれない、傍觀的、輕佻浮薄、武断的、傲慢、盲從的、誠意に欠ける、消極的、反省をきらう、公開したらない）
3. 行動上の弱点（6項目＝破壊、おざなり、

自慢、無意識、罪惡、風向きをうかがう)

それにしても多くの欠点を抉りだしたものである。各項目についての論旨はきわめて鋭いものであり、読む者をして(学生ならずとも)肝を冷やさせる部分が少なくない。これは当然、この約一年間におよぶ闘争のなかで始めて明らかになったことであり、一段と厳しくなっていく次の闘争のために、是非とも克服しなければならないと周恩来が判断した結果である。

残念なことに『覚悟』第二号は、創刊号での「2月20日に出版」という予告にもかかわらず、日の目をみることがなかった。というのも、四十編からなる原稿がそろっていたにもかかわらず、1月下旬の闘争で周恩来をふくむ四人の指導者が逮捕されてしまったからである。

双十節の京津連合デモ

一般民衆をも巻きこんだ学生運動の高まりに、一時は屈服し、被逮捕学生の釈放、曹汝霖ら親日政治家の罷免をせざるを得なかった軍閥政府は、攻撃に転じるチャンスを狙っていた。夏休みで少しは鎮っていたかにみえた学生の動きは再び活発化していた。天津では、学生運動の指導者たち20名によって結成された覚悟社とは別に、天津学生連合会や女界愛国同志会などが合流するかたちで、天津各界救国連合会が結成されていた。覚悟社が一定の共通目的をもった少人数の、いくらか秘密結社めいた、指導中核であるとすれば、「救連」は各団体を統合した大衆組織であった。

中華民国の第8回目の国慶節にあたる10月10日(双十節)は、学生や労働者にとっても軍閥政府にとっても、将来の動向をうらなう大きな一日であった。天津と北京の学生連合会は、これまでも共同歩調をとってきた関係であり、双十節にはこれまでにない大規模な集会とデモを敢行することで、意志の一致をみていた。当局側もすでに察知しており、ことに天津では警察庁長官を張汝桐か

ら楊以德に交替させて、これに備えた。新任の楊長官は「楊椰子」(ヤンパンツ)のあだなをもち、「眼ばたきもせずに人を殺す」人物として恐れられていた。新長官がやった最初の仕事は、結社と出版の自由を認めず、集会とデモを禁止したことである。

10月10日午前。南開大学の広場は、天津の各界から動員された学生や市民の参加者でうずまった。その数約1万。救国連合会はすでに機能しはじめていたし、覚悟社に集まる指導層も気合い十分だった。集会を終え、デモに移ろうとした直前、会場は大きな警帽をかぶった多数の武装警官によって包囲された。予想していたとはいえ、集会参加者の動揺は大きかった。この時である。

「警官も中国人よ！」

「警官も自分の国を愛しなさい！」

「愛国学生を打たないで！」

という女学生たちの声に、一瞬、武装警官はたじろいだ。そのすきに女学生たちがやったことは、大胆にも、警官たちの大きな警帽を次から次へとはねとばすことであった。虚をつかれた警官が地面にころがる警帽をひろう間に、包囲を破ってデモ隊は出発した。一度動きだしたデモの隊列は、そう簡単に阻止できるものではない。旧城内をめぐったデモの列は、最後に、警察庁に押しかけて楊長官を質問攻めにし、翌朝までそれを止めようとしなかった。双十節では、楊椰子と恐れられた新長官を相手に、学生や市民が「一勝」をあげたことになった。そのきっかけを作りだしたのは鄧文淑(穎超)の率いる女子学生宣伝隊であった。

この形勢は年末までつづいている。10月13日の「学生スト」(スト宣言の起草者は周恩来)、11月18、19日の「福州事件抗議集会」と「日貨調査活動」、12月20日の「国民大会」とデモ(参加者数万、日貨を焼き捨てる)などがあり、運動は空前の高まりをむかえた。この間、「覚悟社」と「救連」がうまく任務分担しながら、大きな指導的役

割を演じたことは言うまでもない。

学連・救連の指導者逮捕……

年が明けた1920年、天津ではさらに大きな緊張をむかえることになった。その前年、第一次大戦の講和会議がパリで開かれ、その席上、すでに「対華二十一カ条要求」でみせた日本の野心が山東省に向けられていることが明らかになったからである。日貨排斥運動は一段と高まり、学生と市民の動きもさらに輪を大きくした。直隸省長から天津教育庁に通達ที่だされ、冬休みを操りあげて実施し、学生たちを家へ返すようにという内容のものであった。見方を変えれば、学生の手量はそれ程大きかったのである。覚悟社の秘密の会議が開かれ、「日本の中国内政干渉に反対」「冬休みの操りあげに反対」の方針をうちだすとともに、日貨の組織的な調査を開始することになった。

1月23日夜、東門にちかい魁発成洋貨荘に16箱の日貨のあることが発見された。日貨を見つけしだい没収するのが、当時の常であった。しかし今回は、商店がこれに応じなかったばかりか、日本人の大陸浪人と協力して、学連の検査員に暴行をくわえたのである。翌24日、救連の代表24名が直隸省公署に抗議にいったところ、公署は加害者を不問にふしたばかりでなく、代表者全員が逮捕されてしまった。さらに25日には、各界救国連合会や学生連合会の事務所が急襲され、多数の学生が逮捕され、事務所は封鎖されてしまった。

闘争の指揮部ともいうべき覚悟社は、人目をさけて、フランス租界にあった「維斯理堂」の地下で、三日にわたる秘密会議を開いた。いくらか安全な場所は、租界しかなかったのである。死を覚悟の、厳粛な会議であった。誰もが犠牲になることを名のりたという。そして、来たる29日の請願行動には伍豪（周恩来）と石杉（郭隆真）が前線指揮にあたること、武陵（譚志篤、学連会長）は地下にもぐるこ、鄭岩（鄭季清、女）を連絡

係にすること、壹（鄧文淑、女）を留守責任者にすることなどを決定した。

1月29日午後2時。華北の冬は寒い。この日、天津では北風が吹きあれ、わずかに地上に残っていた粉雪を再び空に舞わせていた。指定された街角には、どこからともなく結集した学生、市民の一群があった。その数約千名。周恩来は請願の三点（不平等条約の撤廃、被逮捕学生の手放、救連および学連事務所の封鎖解除）を宣言した後、「今回の請願は非常に重要な行動であり、各校の指導者は秩序の維持につとめ、無用の混乱を招くことなく、精神的な準備をし、警官の行動に注意して下さい」と呼びかけた。そして、とりどりの旗や標語をもったデモ隊は、スローガンを叫びながら、出発した。その先頭は周恩来、郭隆真ら代表四名であった。

市内を一巡したデモ隊が、金鋼橋にちかい直隸省公署に近づいた時、公署の会議室では、省長の曹鋭と警察庁長官の楊以德が対策に苦慮していた。強行路線をいいたしたのは楊長官であるが、曹省長の顔には苦悩があった。固くとざされた表門をはさみ、「長官に会わせろ」「病気で不在」などのやりとりが約30分もあった後、周恩来ら代表四名は、各校代表の慎重論をしりぞけ、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」の一言を残して、門のうえの横木のところから署内に入った。この時である。待ちかまえていたかのように、二百名の武装警官の群が、寸鉄も身におびない学生、市民のデモ隊に襲いかかった。表門の内と外で、放水攻撃のなかで血なまぐさい弾圧がくりひろげられた。公署前の血塗られた道路から、逮捕された周恩来ら三十名は「同胞万歳！」「学生万歳！」「売国奴を打倒せよ！」などと叫びながら、警察庁へと引かれていった。

「警庁拘留記」より

周恩来をふくむ三十名の学生、市民が逮捕され

た「1・29惨案」とその後の推移について、私たちは『警庁拘留記』（天津新民意報社、1920）および次項でのべる『検庁日録』により、その全貌を知ることができる。拘留の身でありながら、獄中での闘いを組織すると同時に、その記録を残すという強靱な精神に、頭のさがる思いである。

『警庁拘留記』の「叙」にいう。「この本は、天津学生連合会の代表である周恩来君によって編集されたものである。彼らが警察庁に拘留されていた時、ある者は一人の、ある者は二人の部屋に入れられ、意志の疏通をすることができず、話すこともできなかったが、警察庁に拘留されている者がかなりいることだけは知っていた……（検察庁に移される直前に一堂に会した折）周君が各自の報告した情況を集めて編集したのが、この本である」。現在、北京の中国歴史博物館に保存されている手稿の第一頁には「警庁拘留記・飛飛」とある。

長官の楊椰子は「1・29」の一網打尽ともいうべき成果に満足であった。その後の楊の対応がいかに巧妙であり、硬軟を使いわけた取調べであったかは『拘留記』に明らかである。柔軟戦術の傑作は「除夜の日の宴会」であろう。それは、18項目からなる『拘留記』の第10項にあり、次のように始まる。

「2月19日は旧暦の除夜である。楊以徳は会教館に五卓の宴会を準備させ、昼食時、拘留中の26名を花園内の会議室に移し、そこで食事をさせた。逮捕され、隔離されてから20日あまり、今回の集まりでは大いに話し、非常に楽しかった。昼食が終ると楊以徳の演説があり、ついで趙視察長、同科長、保安隊長、副官、巡長の順で話し、全部で三時間以上の大演説であった。それを要約すれば、以下のようなものである。

『私は決して私怨をはらそうというのではありません。皆さんがここにいるのは、完全に上の意

志によるものです。ただ、天津がこうであるからといって、全国がそうだと思ったら大間違いです。これは作りごとではありません。いずれ証拠をお目にかけます……』

『各位の先生方。いいですか、皆さんの後方援助はすっかり無くなっています……』

『国を愛しましょう。国権を守り、国土を守ることを、私は知っています。国土は一寸たりとも他国にくれてやることはできません……』

『周先生の故郷は（周恩来を指さしながら）は黒龍江ではなかったですか。あそこは荒地が多いでしょう。勉強を終えたら、帰って開墾をなささい。金になりますよ……』」

といった具合である。逮捕した者たちが、逮捕された者たちに一席をもうけ、先生呼ばわりをするだけでなく、時として「愛国」を説く凶は、想像しただけでも滑稽である。逮捕された者たち（南開学校教師、商工会議所秘書をふくむ）の団結はかたかった。取調べに対しては「知らない」作戦を貫徹するとともに、不当な拘留が三カ月目におよんだ時、ハンガーストライキを敢行した。『拘留記』「叙」の筆者である馬千里ら7人が4月2日から絶食を開始し、残りの者は5日から食事を拒否した。この新戦術は思わぬ効果をもたらした。というのは、獄中でハンガースト開始という情報が社会に知れると、予想外の大きな反響を引き起こしたのである。その結果、学生の要求していた「公開審理」を、当局側も認めざるを得なくなったのである。4月7日、周恩来らの身がらが天津地方検査庁に送られたところで『警察庁拘留記』は終わっている。なお、同書はまず天津『新民意報』に連載されてから一本にまとめられたものである。

『検庁日録』より

『検庁日録』は、前項の『警庁拘留記』と同様、4月7日、周恩来らが検査庁に移されてから執筆

編集されたものである。「周飛飛編」とある。ただ出版は、その後の困難な事情（連載中の『新民意報』が停刊）などのため、出版されたのは1926年になってからのことである（又新印字館刊）。

『検庁日録』の特徴は、勤工儉学のためフランスに赴く周恩来が「ボルトス」号上で記した「例言」にあるように、「『警庁拘留記』が純粋に客観的な描写法によったのに対し、この『日録』は日々の日記から重要事項を採録し、純粋に主観的な描写法によった」とある通りである。また「例言」のなかで編者は、女子の被逮捕者が日記をつけなかったことから、記述が男子中心になったことを断っている。

『検庁日録』のなかから興味深い部分を紹介してみよう。

「四月十一日：今日は郭隆真の誕生日。周恩来と李散人を責任者として祝賀会を準備する。両人の提案により、国旗をはめこんだ鏡に拘留者全員の姓名を記入してプレゼントすることとし、各室の当番にはかって決定する……」

「4月28日：今日はパリ講和会議で、山東の権益と青島が日本に帰属すると、正式に決定される日である。この恥すべき記念日に、われら獄中の人間は思うことが多い。夜、孟震侯の司会で会議を開く。まず馬千里が『聖書』の一節を読み、次に周恩来が山東問題のいきさつについて、(1)ドイツが青島を占拠していた情況、(2)青島が日本に占拠されたこと、(3)日本人の山東における蛮行、(4)中国参戦の曲折、(5)中国が山東を失うことの自認、(6)講和会議での山東処理の経過、(7)署名拒否の情況等を語る。最後に、馬千里の指導で全員が祈る」

「5月1日：今日はメーデー。私たちは勉強を中止し、全員が各人の部屋の大掃除をする。昼食までかかる。獄中では、労働らしいことは掃除だけである。昼食後、面会の時に弁護士あての手紙を託す……」

「5月4日：今日は記念すべき日である。去年の今日、学生運動が燃えあがったこと、この一年の運動の起伏を回想すれば、各人の胸中は感慨無量である。将来への希望が、各人の脳裡に湧きおこる……夜、周恩来を司会にして慶祝会を開く。獄中では楽器も舞台もなく中国式の演目しかできないが、退屈しのぎの遊びとする！」（関東太鼓、八角鼓などとあるが、楽器をもったと仮想して演奏したようだ）

「5月13日：午後2時、緊急会議を開く。司会は呉鳳岐。所内での新聞禁止についての対応策を話す」（英字紙をふくむ5種類を購読していた）

「5月31日：今日から時間表を少し変える。これまでの英語、数学、歴史、地理に加えて、日本語、心理学、経済学を勉強することにする。経済学は馬千里が、心理学と日本語は周恩来が手ほどきをする……夜、全体会議、周恩来によるマルクス学説、唯物史観の講演」（この講演は連続ものであった）

「6月1日：……マルクス学説の講演が終わったら、馬駿によるアナキズムの講演とすることを決議」

「6月16日：夜、周恩来が全体会議を召集し、陳宝騷の歓迎会を18日夜に開くことを決定する」（陳は病氣療養のためしばらく獄外にあった）

「6月26日：午後面会。譚志篤の報告によれば、弁護士はすでに検査庁に連絡済みであり……7月12日に審理があるとの情報をつかんでいるという」（弁護士の劉崇佑は「救国七君子事件」（1936）でも尽力したことは有名。周恩来、郭隆真ら4名は、7月1日付で劉弁護士に手紙をだしている）

「6月30日：午後、劉崇佑弁護士が来訪し、話し合う。われらの罪状が以下のようなものであることを知る。

- (1) 公安妨害罪：馬千里、時子周……
- (2) 監禁罪：馬千里、時子周……
- (3) 公務妨害罪：李燕豪、師士範……

(4) 騒擾罪：周恩来，于蘭渚……」

「7月6日：……午前7時，各界の男女学生が傍聴に押しかけ，非常な混雑で，裁判所前は立錫の余地もない。全員が傍聴を希望したが，場所に限りがあり，男女の学生に20枚の傍聴券を発行しただけ。さらに各界に50枚の傍聴券を発行。入廷して傍聴した者は約百名，所外で立ったままの者が数百名。9時半，開廷。……まず，馬千里，馬駿……周恩来……郭隆真の順に，氏名，年齢，本籍，職業などの尋問が始まる……」（7月17日の判決まで，検察，被告，弁護人のやりとりが克明に記録されている）

「7月17日：（判決の模様を記した後）ここに，地方裁判所の判決書を再録して，終りとする。……主文：馬千里，馬駿……は共謀してみだりに監禁した罪により，それぞれ五等有期徒刑二月に処す……周恩来，于蘭渚は共謀して騒擾した罪により，それぞれ五等有期徒刑二月に処す……張硯莊，郭隆真は共謀して騒擾した罪により，それぞれ罰金六十元を科す……」

実際には，判決前の拘留2日を1日，拘留2日を一元と換算して，刑および罰金の執行は終了したという裁判長の見解に対し，検察側も同意し，被告全員をその場で釈放した。半年にわたる拘留，裁判を終えて，周恩来ら21名が地方裁判所をでると，各界の人々が9台の車と各人用の記念章を用意して待ちかまえていた。記念章には「為国犠牲」（国のために犠牲となる）の四字が刻まれてあった。

8・16 陶然亭集会

8月初旬，覚悟社の年次総会が開かれた。この14人が参加した覚悟社としての最後の集りがフランス租界でもたれたこと，周恩来が総括を行ったこと，全員の記念撮影をしたことはすでに述べた。「1・29」がそうであったように，周恩来たちに

としては冬休みも夏休みもなかった。

8月16日，北京の永定門にちかい陶然亭でささやかな集会がもたれていた。若い学生たちに，30歳をすぎたばかりと思われる1人を加えて20人ちょっとの参加者である。北京の進歩的な学生団体である「少年中国学会」「青年工読互助団」「曙光社」「人道社」の代表，天津の「覚悟社」の11名，そして指導者格の李大釗である。31歳の李大釗はすでに北京大学教授であり，『新青年』に発表した「庶民の勝利」「ボルシェビズムの勝利」などで，学生の尊敬の的となっていた。彼は翌1921年の中国共産党結成に際し中心人物の一人となり7年後の1927年，軍閥の張作霖により逮捕・殺害されることになる。

今後の運動の方向について討論するために北京でもたれた集会でありながら，司会者は天津「覚悟社」の劉清揚（女性）であった。この間の天津での運動の質を反映したものであることは言うまでもない。鄧文淑（穎超）は「覚悟社」結成からの一年以上にわたる活動について報告し，周恩来が天津における闘争を総括しながら，「連合して改造する」ことについての考えを述べた。団結の必要性和その方法について論じたのである。李大釗は「少年中国学会」を代表して発言，天津からの参加に謝辞を述べた後，旗印を鮮明にすること，各団体間の連絡を強化することを提案した。会議はその後も，北京大学の通信図書館，中山公園の来今雨軒と場所をかえて継続され，「改造連合宣言」と「約章」を成立させている。

「改造連合宣言」には，「五四運動」から1年余をへた学生たちの到達点とその後の方向が明示されている。それは「われわれは『改造』という赤旗のもとに集った青年同志であり，今日の人類は相愛互助の精神にたつべきであると考え，一切の限界を打破するための連合体を組織する……」「人民のなかへ！」というものである。また「約章」には，(1)宣伝事業のための連絡，(2)社会実情

の調査、(3)平民教育の普及、(4)農工組織の運動、(5)婦女独立の促進、が明示されており、総通信部と各地の通信部を設置することが定められている。

一説によれば、天津の「五四運動」のなかで名実ともに指導者となった周恩来と、集会やデモで果敢な行動をし、獄中にあった代表のために献身的な活動をした鄧文淑（穎超）は、この陶然亭公園で永遠の愛を確認したという。

勤工検学の途へ——『覚郵』誌

1920年11月7日、上海を發ってフランスへ向かう「ボルトス」号上には周恩来、郭隆真、劉清揚らの姿があった。当時の中国青年が集団をなしてフランスに赴いた裏には、両国の事情があった。フランスでは、第一次大戦の最中から極度の労働力不足に悩まされていた。フランス政府は中国の青年が非常に勤勉であることに注目し、働きながら勉強させるという条件で誘いをかけていた。一方中国では、自由と平等をかかげた革命の地——フランスで働きながら学べるとあって、有為の貧しい学生は競って志望した。これが「勤工検学」である。第一陣が出發したのは、1919年春のことであった。この流れとは別に、一般の官費あるいは私費による留学生も少なくなかった。興味深いこの動きは本論のテーマではないが、当時のフランスに、蔡和森、李立三、陳延年、李富春、王若飛、陳毅、聶榮臻、鄧小平そして周恩来らが時を同じくしていたことは注目に値する。

「友人の皆さん！『覚悟社』のあったことをまだ記憶していますか」で始まる一文をのせた雑誌『覚郵』が発行されたのは、1923年4月5日のことである。20名で発足した「覚悟社」も、家庭内の圧力で死においやられた者などもあり、最後の年会（20年8月）では14名、北京の陶然亭集会に参加したのは11名であった。そして、周恩来や郭隆真らのフランス留学である。メーデーなどの折々には集会がもたれていたが「この二年半、二

十何人かの社員は中国の南北、欧米に星のように散らばり、学業をつづける者あり、社会で働く者あり、家庭に閑居する者ありで、思想的には落伍した者もなしとしないが、大多数は引きつづき猛進していた」という状況であった。

天津に残る逸豪（鄧文淑）、施珊（李毅韜）、施以（譙小岑）の三人にとって、何よりの励ましは、外国に赴いた同志からの手紙であった。これらの手紙を公開し、「そのなかの問題について、社員以外の者でも、批判することを歓迎する」ために考えられたのが『覚郵』である。これまでも『警庁拘留記』などを掲載した『新民意報』の副刊として発行され、最初のうちは海外の社員からの手紙を中心としていたが、やがて時事評論や天津に残った「覚悟社」員の活動も載るようになった。レーニン逝去日にあたる2月26日にだされた『覚郵』第八期（1924年刊）には、「レーニンを継ぐ者は誰か」という文章がある。『覚郵』中の周恩来の手紙としては、

「独仏問題と革命」伍——逸豪

「西欧の“赤”の情況」伍——小，山

「伍の誓い」伍——衫逸，衫峙

「タゴールの写真に添えて」伍豪——衫峙

などがあるが、「伍の誓い」の一部を引用して本稿をしめくりたい。『覚郵』第二期（1923年4月刊）に載せられたこの手紙中の、「私の認める主義は絶対に変わることはありません」の一句および「生別死離」の詩が、フランス（時としてドイツ）滞在中の心境を最も端的に物語っていると思われるからである。この詩は、少しおくれで覚悟社にはいった黄愛（女性。覚悟社の変名は正品、1922年、湖南省長沙でストライキを指導中に逮捕され、殺害された）を悼んだものであり、周恩来の青年期最後の詩でもある。

生別死離（生きて別れ死んで離れる）

壮烈的死、（壮烈な死）

苟且的生。(いいかげんな生)

貪生怕死,(生を貪り,死を恐れる)

何如重死輕生!

(何と,死の重く生の軽いことか)

生別死離,(生きて別れ死んで離れるとは)

最是難堪事。(最も堪えがたいこと)

別了,牽腸挂肚,

(生きて別れば非常な気がかりであり)

死了,毫無輕重,

(死には少しの輕重もないというが)

何如作个感人的永別!

(何と,深刻な永別であることか)

沒有耕耘,(耕作なくして)

哪來收穫?(どうして收穫があらうか)

沒播革命的種子,(革命の種子をまかずに)

却盼共產花開!(共產の花が開くことだけを
望むとは)

夢想赤色的旗兒飛揚,

(赤色の旗がひるがえることだけを夢想し)

却不用血來染他,

(それを血で染めようとしなはとは)

天下哪有選便宜事?

(天下にそんな簡単なことがあらうか)

……

「我是愛南開的」

すでに「周恩来と天津」の稿を終えたわけであるが、一項を追加しなければならない。それは生前の周恩来のことではなく、彼が短期間在籍した南開大学にある記念碑のことである。南開大学の正門を通り、一直線の舗装道路を二百メートルも行くと、右手に「馬蹄湖」とよばれる池がある。中心部に小島があり、水面は馬の蹄のような形をしている。夏ともなれば一面のハスが美しい。

1979年10月17日、南開大学の創立60周年記念日にあたるその日、馬蹄湖の小島に「周恩来同志紀念碑」が建てられた。高さ約1メートルの基石のう

えに、高さ2メートル、幅4メートルの漢白玉の碑がすえられた。碑の前面には、周恩来の顔の銅製レリーフと「我是愛南開的」(私は南開を愛する)の六文字があり、裏面には記念碑の由来を記した一文がある。その全文は、以下のようなものである。

「周恩来同志は、1917年、南開学校を卒業し、9月に日本へ留学した。1919年4月、帰国し、9月に南開大学に入学し、わが校の第一期生である。「五四」の時期、天津人民の反帝反封建の愛国運動を指導するとともに、覚悟社を創設した。翌年7月、学校を離れ、のち勤工儉学のため渡仏した。

抗日戦争の時期、周恩来同志は重慶でいつも沙坪壩にあったわが校の経済研究所と南開同人宿舍を訪れ、天下の大勢を論じ、わが党の方針と政策を宣伝して、師友が団結して抗日にあたるよう激励した。

解放後、周恩来同志は連日の激務にもかかわらず、たえず南開大学の発展に心を寄せ、1951年2月、1957年4月、1959年5月の三回にわたって母校を視察し、重要な指示を行った。

ここに開校六十周年にあたり、全校の教師、学生、職員は往事を追憶して、その遺志を継ぎ、祖国を建設し、四つの現代化を実現することを誓うものである。周恩来同志に対する熱愛の情を表すために、謹んで碑を建て、永遠に誌す

南開大学 建

楊 石先 書

一九七九年十月十七日

「私は南開を愛す」は、1917年、周恩来同志が留日南開同学会にあてた手紙から引用したものである」。

今日(2月20日)の『天津日報』によれば、昨年の十大ベストセラーのトップは『周恩来選集』上巻であり、746万部であるという。第二位は85万部である。ちなみに同『選集』では、本稿でふれた周恩来の文章は対象外とされている。

(1982. 2. 20 在天津)

〔主な引用・参考文献〕

『周恩来文選』（南開『敬業』）南開大学歴史研究所周恩来研究室編刊，1979. 7

『周恩来文選』（南開『校風』）南開大学歴史研究所周恩来研究室編刊，1979. 7

『周恩来詩文集』（『覚悟』『覚郵』）南開大

学・天津歴史博物館・天津社会科学院図書館共編刊，1980. 1

『警庁拘留記』周恩来編著 天津新民意報社刊 1920. 12

『検庁日録』周恩来編著 天津又新印字館刊 1926

『周恩来同志青年時代在天津革命活動紀念館簡介』（パンフレット）同館編刊 1978. 3

（19頁からつづく）競って転載する必要はない」とあり，これは解放軍報の批判論文を人民日報などが転載しなかったことをふまえている。

《新観察》に載った白樺の文章は7月25日号（第14期）、「春はわれにかくも暖かし」。《苦恋》への批判に対する白樺の受け取りかたや心境はそのタイトルからも読みとれる。その一節に、「4月に入ってからわたしは1000通近くもの手紙や電報を受け取った。読者からの手紙はもらいつけているが，この時期ほど多かったことはない。毎日夕方になると王くんがにこにこしながらどっさり持ってきてくれる。未知の人たちからの手紙に目を通しながら，職業やら性格やら姿などを思い浮かべつつ，返信を書くものを選んでいく。しばしば感動のあまり痛哭失声し……」とある。

〈王蒙ショートショート選=2〉

もちつもたれつ

（『花城』81年4期所載）

I氏が文壇に登場してから，既に相当の年月がたった。しかし今月まで，ベストセラーになるような作品はひとつも書いていなかった。I氏はこのことを昨今とみに寂しく感じるようになった。

そこで，コネをたよりに著名な評論家のJ氏になんとかかわたりをつけ，一席設け大いにもてなした。席上J氏は，I氏のもてなしに感ずる所があり，その意にこたえるべく，こう言った。「たしかに人々はあなたの作品に冷淡すぎる。あなたの

だがこのあと，人民日報は8月18日付紙上に「文芸批判の武器をしっかりと掌握しよう」と題する評論員論文を一面に掲載し，《苦恋》批判の局面は転換して批判一色へと傾斜する。そのなかで（文芸界に存在する）軟弱，散漫の欠点は，本紙（人民日報）の文芸批評にも存在しており，……誤った傾向の作品や言論に対し，往々にして堂々と，説得力のある批判を進めることができなかった」と自己批判している。そして9月25日，党主席の胡耀邦が人民大会堂で行われた魯迅生誕100周年記念集会冒頭の演説で，かなりの時間を費やして文芸界に存在する周知の問題について党中央の見解を表明し，以降論調は定まった。

（本文作成に当たり，岩田真佐子さんの協力をえた。記して謝意を表する。）

作品は正しく評価されていないんだ。よろしい，ひとつ私が一流紙であなたの作品をもち上げてさしあげましょう。なんといっても……」

I氏はあわててさえぎった。「それはいけません。何とぞそれだけはかんべんして下さい。むしろ，遠慮会釈なく，徹底的に私の作品をやっつけて頂きたいのです。私の経験からしますと，先生に批判された作品は，必ず全国で競って読まれ，外国にも知れ渡ります。同時に先生ご自身も，別種の名誉と利益を手にすることができます。つまり，表面敵対しつつ，実はもちつもたれつ，という具合にお願いしたいのです。

（菱沼透・訳）